

所 陵

No. 54

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



石鏃貫入猪頭骨 Wild Boar Skull Penetrating Stone Arrowhead
(宮城県気仙沼郡小友村獺澤出土 縄文時代)

● 目 次 ●

網干善教先生—その人と学問—	米田 文孝	2
絵師宗達が『平家納経』『清盛公願文』附属文書「櫛筆」の謎を解く	林 進	6
頭屋の妻	黒田 一充	8
自然観察会に参加してみませんか？—自然系博物館からの手紙—	河合 正人	10
一枚摺の魅力—明治の引札と大小暦—	内海 寧子	12
クントゥル・ワシ博物館—日本アンデス調査団の奮闘記—	荒田 恵	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

網干善教先生 —その人と学問—

米 田 文 孝

2006年7月29日、薬石の効なく恩師網干善教先生が入寂されて早や半年、烏兔^{うう}匆々^{きんきん}を思う日々であり、無常迅速、追慕の念がつのる。この間、先生の幅広い交友関係から多くの方々が生先生の卓越した学業やお人柄などについて追悼の言葉を表され、9月16日には学校法人関西大学理事長森本靖一郎氏、奈良県明日香村村長関義清氏、飛鳥古京を守る会会長山崎馨氏を發起人として「網干先生を偲ぶ会」が古里の明日香村でしめやかに執り行われた。享年80歳、法名は純蓮社宗譽考學善教和尚。従五位瑞宝中綬章の叙位叙勲の榮に浴された。

先生の遺された考古学における業績は不滅のものであろう。それは五條猫塚古墳、室宮山古墳、飛鳥京跡、高松塚古墳、祇園精舎遺跡をはじめとする国内外に及ぶ多くの主要遺跡の発掘調査と報告書の出版、『高松塚古墳の研究』『終末期古墳の研究』『壁面古墳の研究』などの巨冊の研究書の上梓は永く考古学史上に輝く金字塔である。しかし、学業以外で忘れてはならない重要なことに、理想を掲げ信念をもって後進の考古学徒を多く育成されたことがある。

網干善教先生には大学入学以来、32年余りご指導いただいたが、走馬燈の如くこの間の出来事が脳裏を駆けめぐる。先生とは、関西大学創立100周年記念事業の一環として実施されたインド共和国サヘート（祇園精舎）遺跡の発掘調査をはじめ、長期間に及び寝食を共にさせていただいた。その時をはじめ、折にふれて先生のご幼少時代から考古学を志向された学生時代、そして公立学校の教員を務めながら考古学に明け暮れておられた時代のことを拝聞した。ここでは余り語られることがない若き時代の先生の足跡を辿り、追悼の言葉にしたい。

網干善教先生は1927年9月29日、奈良県桜井市でご出生になり、1930年には浄土宗の僧侶であった御尊父が高市郡高市村（現明日香村）島庄にある唯称寺の住職に就かれたことから、石舞台古墳に近接した場所に転居された。

当時の石舞台古墳は特別史跡に指定された現在と異なり、その周辺には畑と田圃が広がっていた。ほとんど人影もなく地域の子どもの格好な遊び場所であり、網干先生、幼名昭太郎少年も小学校入学以前は終日この付近でよく遊ばれたという。この話題について遠くを見るような目で語られた柔和なお姿を、昨日のことにように思い出す。

1933年の秋、末永雅雄先生により石舞台古墳の第一次発掘調査が開始された。この調査では、横穴石室内を埋め尽くした土砂を運び出すため、当時としては先進的なトロッコが使用された。調査隊が唯称寺の本堂を集会所として借用したことや村の人たちが発掘作業員として参加していたこともあり、先生は土砂を捨てた帰りの空車に乗せてもらったりすることが楽しみで、作業が行われている日は毎日のように現場に行かれたという。1935年の第二次発掘調査時には、石舞台古墳の下にあった高市小学校に入学されていたが、低学年であるため学校が終わるのが早く、やはり夕方まで発掘現場で遊ばれていたという。

この発掘現場で、先生は終生に及び師弟の絆で堅く結ばれる末永雅雄先生と邂逅された。網干先生の言をお借りすると、「運命的、奇跡的な出逢い」であったが、「大昔の謎に挑む探偵さん、って感じで憧れていた」という。末永先生には作業の休憩中にお菓子をもらったり、かわいがってもらったりしたという。後年になるが1955年2月、網干先生は石舞台古墳復元工事の事前調査をご担当することになり、奇縁を感じるとともに末永先生のご配慮に深く感謝されたという。

1940年、小学校を卒業された先生は奈良県立畝傍中学校に入学された（旧制中45回卒）。入学早々、「考古学部新入生募集」の貼紙をみて、考古学資料で溢れた部室（徴古室）に行かれたという。当時、考古学部の顧問をされていたのは西洋史ご担当の日色四郎先生であった。



榎原考古学研究所にて（後列左端網干先生、前列中央末永先生）

戦前の旧制中学では珍しい今でいうクラブ活動である考古学部は、考古学の立場から邪馬台国畿内説を提唱した高橋健自氏を歴史科教員として1897年に招いたことを契機に創設された。先輩には松本清張氏の『断碑』のモデルとなった森本六爾氏や、國學院大學の樋口清之氏などがおられ、有為の人材を輩出した輝かしい伝統と実績があった。

先生は早速入部されたが4月下旬のある日曜日、榎原遺跡の発掘調査に参加されていた日色先生に連れられ、創設間もない榎原考古学研究所に行かれたという。その場で石舞台古墳発掘調査時の昭太郎少年のこともよく覚えておられた所長の末永先生から、「もう中学生になったのか、勉強したければ研究所へ来てもいいよ」といわれ、「それが大変うれしかったので、それから毎週日曜日になると研究所に通った。学校ではクラブで先生や上級生から教えてもらい、日曜日は研究所でお手伝いをしたおかげで2年生になった頃には研究発表もできるように

なった。一番最初は横穴式石室の比較というものを発表」されるようになり、研究所では澄田正一氏（名古屋大学）や酒詰伸男氏（同志社大学）らに教示を受けられたという。この間の事情については、社会科教諭をされていた高田中学校の学校新聞の記事（「僕の中学時代 夏休みの思い出」1960年7月20日号）に詳しい。

この記事と相前後する1960年7月には、御所市鴨都波遺跡の発掘調査をご担当されたが、この調査には県立畝傍高校歴史クラブに所属する生徒に参加させられた。発掘調査自体は7月24日から約10日間の予定で実施されたが、先生は約1週間前から毎日、放課後に歴史クラブに所属する生徒（111人）を対象として、鴨都波遺跡の概要や遺構実測の方法、出土品の取扱い方法などの事前学習を行われたという（「産業経済新聞」昭和35年7月15・17日付記事）。

この背景には、先生の言をお借りすれば「中学生の夏期休暇中に参加された榎原市新沢一遺跡の発掘調査が鮮烈な原体験」にあるという。

なお、このとき発掘に明け暮れた生徒の一人に、当時3年生であった滋賀県立大学の菅谷文則氏がおられる。先生は晩年に至るまで人にものを教えることを厭わず、常懇切丁寧に相手の目線にあわせて熱心に説明されていた。

旧制畝傍中学を卒業された先生は佛教専門学校（現佛教大学）で仏教学、仏教史学を学ばれた後、末永先生が考古学の講義を担当されていたことから1948年、龍谷大学に進学され国史学を専攻された。龍谷大学では石浜純太郎先生や魚澄惣五郎先生などの講筵に座され、旧制大学院を経て1954年に修了された。

この年、御所中学校の校長であった日色先生が54歳で永眠されたが、先生は1967年に日色先生のご研究成果を『日本上代井の研究』として、ご命日の5月3日に上梓され御霊前に献上された人情のあつい人であった。特に、後学の徒が斃れると人一倍悲しんでおられた。飛鳥京跡の調査でともに歩まれた亀田博氏は2000年4月に52歳でご逝去されたが、控えめではあるがことあるごとに亀田氏の学位論文『日韓古代宮都の研究』の刊行が生前に間に合わなかったことを残念がられていた。

先生は大学院在学中、飛鳥寺瓦窯跡の調査を担当されたことを嚆矢に、爾後飛鳥地域の発掘調査に邁進され燦然たる業績を積み重ねられるようになるが、「飛鳥は僕を生み、育ててくれたところ。飛鳥の地面に密着して飛鳥解明の防人のつもりでやってきた」と飛鳥に限りなき愛着と誇りを示されるのが常であった。まさしく、「わが古里飛鳥」の発掘を通じて、アジア文化の流れを、日本古代史の実像を解明しようとされた年月であった。

先生は数々の栄誉を受けられたが、ことのほか2005年の明日香名誉村民の称号顕彰を喜んでおられた。しかし、先生が望まれていた最も重要なことは、将来に対する考古学研究への貢献と、多くの考古学徒の育成であったと思う。



末永先生と綱干先生

網干 善教先生 御略歴

1927年(昭和2)	9月29日	高市郡明日香村(旧高市村)島庄にご誕生
1933年(昭和8)	10月	末永雅雄先生による石舞台古墳第1次発掘調査開始
1940年(昭和15)	4月	奈良県立畝傍中学校(現畝傍高等学校)入学 卒業後、佛教専門学校(現佛教大学)入学
1948年(昭和23)	4月	龍谷大学文学部国史学科 入学
1951年(昭和26)	3月	龍谷大学文学部史学科国史学専攻(旧制)卒業
1951年(昭和26)	4月	奈良県高市郡飛鳥村立飛鳥中学校教諭
1952年(昭和27)	4月	奈良県大和高田市立高田中学校教諭
1954年(昭和29)	3月	龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了
1955年(昭和30)	11月	奈良県立橿原考古学研究所員(現在に至る)
1957年(昭和32)	5月	龍谷大学副手(昭和34年3月まで)
1962年(昭和37)	4月	奈良県立奈良商工高等学校教諭
1962年(昭和37)	4月	龍谷大学非常勤講師(平成17年3月まで)
1963年(昭和38)	4月	佛教大学非常勤講師(平成18年3月まで)
1966年(昭和41)	4月	関西大学非常勤講師(昭和42年3月まで)
1967年(昭和42)	4月	関西大学文学部専任講師(昭和44年3月まで)
1968年(昭和43)	10月	第2阪和国道遺跡調査会委員(昭和44年3月まで)
1969年(昭和44)	4月	関西大学文学部助教授(昭和48年3月まで)
1970年(昭和45)	3月	飛鳥古京を守る会委員(平成18年7月まで)
1971年(昭和46)	8月	明日香村文化財保護委員会委員(平成18年7月まで)
1973年(昭和48)	4月	関西大学文学部教授(平成10年3月まで)
1975年(昭和50)	4月	飛鳥地域総合計画調査会委員(昭和51年3月まで)
1975年(昭和50)	4月	平城・飛鳥藤原京跡調査整備委員会委員(平成10年9月まで)
1975年(昭和50)	10月	関西大学考古学等資料室管理運営委員会委員(委員長)(平成6年3月まで)
1982年(昭和57)	6月	全国大学博物館学講座協議会委員長(平成7年10月まで)
1982年(昭和57)	6月	全国大学博物館学講座協議会西日本部会会長(平成7年10月まで)
1983年(昭和58)	7月	奈良県立橿原考古学研究所指導委員(平成18年7月まで)
1985年(昭和60)	8月	狭山池調査委員会委員(平成5年3月まで)
1985年(昭和60)	8月	関西大学日・印共同学術調査派遣調査隊長(平成元年3月まで)
1988年(昭和63)	6月	マルコ山古墳環境整備委員会委員(平成8年3月まで)
1988年(昭和63)	10月	関西日印文化協会名誉会員理事(平成18年7月まで)
1994年(平成6)	4月	関西大学博物館長(平成10年3月まで)
1996年(平成8)	6月	キトラ古墳調査委員会顧問(平成13年3月まで)
1997年(平成9)	4月	明日香村文化財顧問(平成18年7月まで)
1998年(平成10)	3月	関西大学を定年退職
1998年(平成10)	4月	関西大学名誉教授
1998年(平成10)	4月	関西大学飛鳥文化研究所長(平成18年7月まで)
1999年(平成11)	7月	奈良県文化財保存評議会委員(平成18年7月まで)
2000年(平成12)	10月	関西大学評議員(平成16年9月まで)
2002年(平成14)	2月	明日香村史基本委員会委員長(平成18年7月まで)
2002年(平成14)	3月	飛鳥保存財団評議員会議長(平成18年7月まで)
2003年(平成15)	4月	飛鳥古京を守る会委員長(平成18年7月まで)
2005年(平成17)	4月	宮内庁書陵部委員(平成18年7月まで)
2006年(平成18)	7月29日	死亡(胆管癌)

受賞歴

(賞 罰)

1977年(昭和52)	3月	第2回 郷土史研究特賞
1997年(平成9)	5月	龍谷賞
1998年(平成10)	10月	奈良新聞文化賞
2002年(平成14)	11月	大阪文化賞
2002年(平成14)	11月	明日香村自治功労賞
2005年(平成17)	3月	明日香村名誉村民の称号顕彰
2006年(平成18)	7月	従五位瑞宝中授章 叙位叙勲

絵師宗達が『平家納経』『清盛公願文』 附属文書「櫛筆」の謎を解く

林 進

平安時代末期の長寛元年（1163）に、思いもかけず従二位、権中納言、兼皇太后宮権大夫という高位の位階、官職に昇った平清盛（1118－81）は、その報謝の意味をこめて安芸国宮島の伊都岐島神（女神）の御利生に対する法華経の供養を思い立った。家督重盛や弟の経盛、教盛、頼盛ら一門の人たち、家僕あわせて三十二人が『法華経』（一品経）二十八卷、『無量義経』一卷、『観普賢経』一卷、『阿弥陀経』一卷、『般若心経』一卷を分担、書写し、『清盛公願文』一卷を添え、あわせて三十三卷を『金銀荘雲龍文銅製経箱』一合に納め、長寛2年（1164）9月に厳島神社宝殿に安置した。この善美を尽くした王朝の美しい装飾経は、現在、国宝『平家納経』と呼ばれる。

その後、桃山時代に『平家納経』は安芸・備後守となった福島正則（1561－1624）によって修復が加えられ、新造の外箱『薦文蒔絵唐櫃』に納められ、慶長7年（1602）5月に厳島神社に再び奉納された。この慶長期の修理の際、『法華経』二十八品のうち「化城喻品」「喩累品」そして「清盛公願文」それぞれの表紙絵・見返絵、あわせて六件が新たに制作された。

その金銀泥・着彩による絵画表現の特色から、補作を行ったのは、京の絵師宗達（生没年不詳）ではないかと推定されている。この「宗達」説はかつて明治・大正期の美術蒐集家原富太郎、益田孝、複製作家田中親美らによって唱えられ、現在肯定されるに至った。また、慶

長11年（1606）に京の豪商で能書家角倉素庵（1571－1632）によって書写された観世流謡本『藍染川』（大和文華館蔵、写真1）は雲母刷り文様の装飾料紙の上に金銀泥の肉筆で「鶴」「若松」「薄」などが描かれており、それを描いたのは素庵と親交のあった宗達と推定される。この金銀泥による描写の特徴、雲母刷り文様の形が『平家納経』補作の表紙絵・見返絵（写真4・3）のそれに通じるものがあることから、その説は首肯される。

当時、補作に当たった宗達は、『平家納経』の莊嚴の在り方を調べ、とくに「授記品」の表紙絵・見返絵における金の洲浜形と銀の洲浜形の対比の妙趣、つまり朝夕二度の満潮時に現れる洲浜を表裏同形で表すという斬新な意匠に注目した。彼はこれにヒントを得て「化城喻品」では、表紙には浜松と洲流し、見返しには満ち潮と槇の磯山を描き、「喩累品」では、表紙には散る梅花、見返しには満ち潮と槇のある磯辺、雲を描いている。彼は『平家物語』の主題である「栄枯盛衰」すなわち「無常観」を表紙の表裏でもって表し、清盛をはじめとする平家一門と、保元の乱（1156年7月）に敗れ讃岐国に配流され不幸な最期をとげた崇徳院（1119－64）への追善の意味を新補の絵に込めた。

「願文」の本紙（5枚の斐紙）を巻き終った第1紙裏面の左端側には手垢による黒い汚れが認められる。本来「願文」に表紙が付いていれば、このような黒いしみは生じない。とすれば、慶長の修理の際、「願文」を保護するために新たに表紙が取り付けられたとしか考えられない。

新補の表紙（写真4）には金銀泥による「靡く薄」と金泥による「横筋の雲」が描かれ、晩秋落日の薄の原を表す。その見返し（写真3）には早春の山麓で「若草」を喰む身籠の「雌鹿」が金泥で描かれ、その鹿の半円の形は、山際から昇る「朝日」を見立てたものである。金銀泥・微塵による「雲」は雨を降らし生き物を育てることを暗示する。

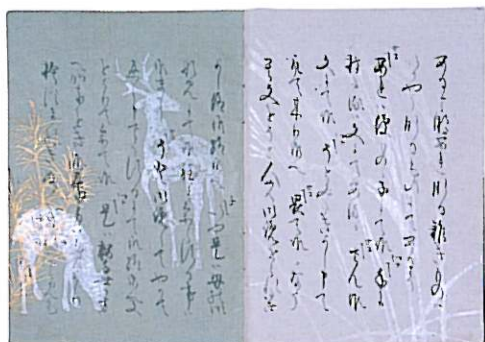


写真1 観世流謡本『藍染川』 慶長11年書写



写真2 「櫛筆」文書



写真3 『平家納経』「願文」見返絵



写真4 『平家納経』「願文」表紙絵

その表紙絵と見返絵は「死」と「生」を象徴的に表したもので、仏教の「無常」を意味する。また四季の「秋」と厳島神社のある「安芸」、「鹿原・麓原」と平家一門の邸宅があった「六波羅（六原）」という同音異義の言葉の修辞法、「掛詞」が使われている。

見返しに「鹿」を描いた理由としては、厳島に生息する「神鹿」を意図したにちがいないが、また修理時に清盛自筆の文書「櫛筆、仁安元年十一月十八日、内大臣平朝臣清盛」（写真2）が発見され、そのこととも関係する。この「櫛筆」文書は金銀砂子、小切箔散らしの装飾料紙に書かれたもので、その際、見返し（表紙）と願文本紙との間に挿入して、改めて卷子装にされた。

この「櫛筆」とは一体、何を意味するのか。その謎解きには、今まで多くの人がいろいろの説を提示した。たとえば「報賽目録の断簡」（亀田孜氏）、「崇徳院の怨霊を退散させるための呪術の言葉」（小松茂美氏）などがある。

「櫛筆」文書が書かれた七日前、仁安元年（1166）十一月十一日に清盛は内大臣に昇任された。彼は二度目の厳島の神への報謝として面白い趣向を思い付いた。それは、二年前の『平家納経』の書写に用いた「鹿の巻筆」（写経や願文の書写にこの筆が用いられた）を「櫛笥」（くしげ）の中に「櫛」のように並べ置き奉納することであった。それは清盛一人の見立て遊びであった。美しい装飾料紙に書かれた「櫛筆」文書はその「奉納目録」である。その後、その「筆」と「櫛笥」は失われたが、幸い清盛が書いたその「奉納目録」一通は長い年月、理

解されないままに『平家納経』に添えられて伝存したのである。

最初に「櫛筆」の謎を解いたのは、じつは宗達その人である。彼は「櫛筆」の意味を理解し、見返しに「鹿」を描き、「櫛筆」文書と合せたのである。それには根拠がある。

崇徳院の実弟である後白河法皇（1127－92）の御撰にかかる『梁塵秘抄』の法文歌の中に「峯に起き臥す鹿だにも、仏に成ることいと易し、己れが上毛を整へ筆に結び、一乗妙法書いたんなる功德に（山の峰の辺りに住む鹿でさえも、成仏することができる。それは決して難しいことではない。自分の身の上毛を揃え束ねて筆を作り、ありがたい法華経を書き写したその功德によって、まちがいなく成仏できるからである）」という今様がある。すなわち、鹿も筆の功德で成仏できるという。宗達はその法文歌から鹿毛筆の供養を思い付いた。かつて清盛が行った趣向を見抜いたのである。

宗達が鴨東の清水坂辺り、葬送の地である鳥辺山の麓の「六原（ろくはら）」に居住していたことについては、藤本宗舟（素庵の友人）・角倉平次（素庵の次男）宛の『角倉与一（素庵）書状』（個人蔵）によってわかる。無名の絵師宗達が『平家納経』の補作を依頼された理由は、おそらく、かつて清盛の「六波羅第」があった同じ土地に彼が住んでいたからではなかったか。すでに色紙、短冊、扇面などの料紙装飾に異才があった宗達を福島正則に推薦したのは、おそらく宗達の知己である素庵であったと、私は推理している。

頭屋の妻

黒田 一 充

各地の宮座の祭りでは、男性だけに限定して儀礼が行なわれるところが現在も多い。ただ、祭りの主宰や準備を行う当番の家（頭屋・当屋）から神社へ向かう行列の中に、人身御供の伝説とともに神饌を入れた器を頭上に載せて運ぶ女性が出ることから（写真1）、かつては女性が宮座の祭りに関与した姿を残すものとされている。しかし、女性が宮座の祭りに関わることは、本当になくなったと考えてよいのだろうか。

岡山県吉備中央町（旧賀陽町）の吉川八幡宮の10月の当番祭では、南北ふたつの地区の10歳前後の男児から当番と呼ぶ祭りの中心となる役を選ぶことから始まる。当番の家は当屋と呼ばれ、前庭に屋根を



写真1 敦賀市刀根のヒツノフタ
頭上に神饌を入れた桶を
かかげる

越える長さの竹を立てる。その先端には御幣を付け、下部には円錐形の藁小屋を造って供物をする。これはハクケと呼ばれ、神霊を迎える施設だと考えられている。10月第4日曜（もとは26日）の祭りが近づくと、神社の境内に木の柵に檜の葉で壁を造った直径約



写真2 吉備中央町・吉川八幡宮の仮屋
入り口の頭屋夫婦、仮屋の正面奥に白衣衣装の当番

5メートルの円形の区画が2つ設けられる。仮屋と呼ばれ、宵宮と祭りの当日に馬に乗って来た当番と神姿の警護の衆だけが中に座る。もともと宵宮には、中に少し座った後、神事をして午前中には当屋へ帰り、翌朝再び行列を繰り返すことから、もとはこの仮屋に屋根があり、一晚ここで過ごしたと思われる。

この仮屋には男性しか入れないことになっているが、その入り口の所には晴れ着の当屋夫婦が座し、訪れた人びとに挨拶をする（写真2）。この場にいる唯一の女性は、当番の母親である。当番の世話は、寝食をともにする伝守の青年が行うため、当屋夫婦の仕事は特になく、神輿とともに御旅所へも行くが、外で儀礼を見守るだけで、あくまで当番が祭りの主役である。

仮屋に当番が到着すると、地区の人びとがそれぞれ祝儀の金品を持って挨拶に来る。祝儀には、「御飲」と表書きが記されているが、これは当番に対するお飲みであるとともに、無事に当番を勤めるまで育てた両親に対するお飲みでもある。神社に行くのは男性だけだが、女性たちは当屋の家で食事を用意して待っており、神社から戻るとお祝いの席が設けられる。

兵庫県篠山市西本荘の春日神社では、西本荘と東本荘の二つの地区でそれぞれ祭りを主宰する当主が廻される。祭りが近づくと、当主宅の座敷の庭先にオハケさんを造る。玉砂利を敷いて、松の割木12束を積み重ね、約3メートルの長さの青竹を立てる。その先端には藁束を付け、12本の御幣を挿す（写真3）。祭りは2月14日（もとは旧正月元日）早朝に神社へ参拝し、竹の先に柿や椿の葉を付け、それを12本藁苞に挿した花かんざしや鯛・ゴボウを供える。その夜に直会が行われ、当主の引継ぎが行われる。

現在は定まった順番で廻るが、かつては必ず嫁を迎えた新婚の長男が当主を勤めたという。直会の場は羽織袴の男性だけが着席するが、女性でただひとり、嫁入り衣装を着た当主の嫁が

夫婦でこの席に座した。当主を勤めることは、新しく村に迎えた嫁を村人に披露するとともに、村人たちがそれを認める儀礼でもあったのである。ここでも他の女性たちは、儀礼の席には出ていないが、食事の準備とともに次の間で会食をする。

福井県敦賀市刀根の気比神社の12月第1日曜（もとは3日）の霜月祭では、東座・西座の頭屋宅から供物を神社に運んで神事を行う。東座・西座は、現在は方角ではなく年長者が東座となる。早朝に手伝いの男性たちが棒杵で搗いた餅を宮あげという役が先に神社へ運んで準備をし、その後に頭屋の一行が向かう。先頭はショードン（正殿）と呼ぶ10歳前後の男児で、干柿を入れた桶を頭上にかざしたヒツノフタ（櫃の蓋）の少女などが続く。このショードンも吉川八幡宮の当番と同様、祭りの中心的存在であるが、刀根でも頭屋の長男が勤めることを原則としている。この祭りは、女性の関与が多く見られ、神饌の準備は頭屋の親戚（ジミョウという）の年配の女性が穀蒸という役で差配する。

神社での神事の間に、頭屋宅では、頭屋の代理の男性から来年の頭屋への引継ぎの儀礼が行われた。現在の準備や儀礼は頭屋の家ではなく、地区の公会堂に移ったため、引継ぎも祭りの終わった後に、地区の男性たちが紋付袴姿で見守る場で行われる。この時、引継ぎの印として、オトウを来年の頭屋へ引継ぐ。オトウは木の台に箸を置きその上に載せた籠皿に、東座は揚げ豆腐、西座は鯉を紙に包んで入れる。これは神の膳といわれる。その後、この膳は頭屋の親戚の既婚の女性が前方高くかかげて運び、玄関の戸を開ける役の女性とともに新しい頭屋の家へ向かう。新頭屋宅では、待ち受けていた妻がそれを受取る（写真4）。

普通、頭屋の引継ぎは神事が終わった後に行われるはずだが、何らかの事情で神事の最中になってしまったために代理の女性が運んでいるが、その女性が既婚と定められていることから、本来は頭屋の妻が運んでいたと考えられる。そうだとすると、刀根では妻から妻への頭屋の引継ぎも行われているのである。つまり、頭屋は夫だけが引継いでいるのではなく、妻もその役割を果たし、夫婦で勤めるという原則が



写真3 篠山市東本荘のオハケさん
現在は地区の公民館前に造られる



写真4 敦賀市刀根の霜月祭
オトウ（神の膳）を受ける新頭屋の妻

あったことがうかがえる。しかも、頭屋を引き受ける契機として、嫁入り時や長男が神事の役を勤めることができる年齢に達した時点、すなわち跡取りを育てた時点など、村によって時期は異なるが、いずれも夫婦で頭屋を勤めることで、嫁いで来た女性を村のメンバーとして正式に認める意味合いをも含んでいる。もちろん、加入を認めるのは祭りの儀礼に参加している男性だけであるはずではなく、裏方として食事の世話をする女性たちからも認められなければならない。確かに儀礼面だけ見ると、宮座の儀礼は男性の祭りだと見えるが、そうした見方は本質を見逃しているのではないだろうか。

自然観察会に参加してみませんか？

——自然系博物館からの手紙——

河 合 正 人

関西大学博物館のなんでも相談会に、私が関わるようになったのは2004年の夏からで、先輩学芸員で元大阪市立自然史博物館館長の宮武頼夫氏の誘いを受けたのがはじまりだった。私も自然系博物館にいた者で、やはり昆虫を専門分野としている者なのだが、それが歴史物を中心とした、特に考古遺物を専門的に扱う博物館、つまり文科系の博物館に関わるのはどういう目的があるのだろうか？ またはどのような意味があるのだろうかと考えてみた。

開かれた大学、地域住民に密着した大学を目指す一つの方向性として、子供たちもなじめる機会を持とうということで、昆虫を主に扱う宮武氏、そして私にお呼びがかかったのだろうか？

自然と文化の組み合わせということになると、違和感を持たれるかもしれない。対象物が全く異なる感じがするのは確かである。しかし、自然観察会となると少し違ってくる。

自然観察と一口に言ってもその対象や方法は様々で、自然物を研究対象として、みんなでいろんな角度から観るものから、入門的にゲームを楽しんだり、工作や料理を通して自然物に触れる試みのものまでいろんな形態の自然観察会がある。珍しい生き物や景色を見る観劇ツアー

的な観察会もあって、これもそれなりに文化を見ることができるものではあるが、通常は何かの分野の専門的な範囲を詳しく見るものが多く、一見、人間が作り出す「文化」の産物とは縁がなさそうに見えることが多い。しかし自然観察というものは、何も深山幽谷の地や離島巡りをするものばかりではなく、身近な所の普通の生き物の生活を見たり、日常の現象を「主体的な目」で見ることから始められるものである。

自然観察会は極近所の身近な場所でもできる。昆虫とか雑草とかを観察の対象にすると観察場所がぐっと身近になってくる。昆虫やいわゆる雑草類は生活のサイクルが早く、生存を他の植物や樹木に依存しているものや、日照や水の流れのちょっとした変化に影響を受けるものが多いが、それは環境の変化に対する反応が早いということである。そして昆虫を対象にするとエサやすみ家としての樹木も対象になる。自然環境、時には景観をわかりやすく示してくれるものとしては樹木の分布も重要であるが、これらはその地域の産業に結びついた産業の誕生に関与することも多かったはず。

観察テーマも人間の歴史や産業の影響力との関係が浮かび上がってくる。自然環境が人間の文化に与える影響は決して小さくはない。どんな作物が生産されるのか、作物の競争相手は何か、どんな材木が供給できるのか、古い時代の工業製品に対してはその土地の樹木、水、土質、地形の影響は極めて大きかった。

現在のように物質・情報共に流通機能が発達し、価値観の平均化が早まると見えてきにくいのが、元々は産業の発達と自然環境は縁の深いものがあつたはずで、自然観察の視点は歴史を見る眼と決して無関係ではない。

私は昆虫を対象にした自然観察会を行うことが多い。そこでは先ずは見つけた虫の名前を調べ、またその時の様子や周りの状況と比べ合わ



観察会風景

せて、大きな特徴を説明しようとするが、そこに続くテーマとして「どんなものを食べているのか」「どんな所に住んでいるのか」「どんな地域に住んでいるのか」を説明したり、みんなで考えたりする。もう少し具体的には「どんな植物を食べているのか」「どんな虫を捕まえたり、寄生していたりするのか」「巣はどうやって作っているのか」「成虫ならば、幼虫時代はどんな虫だったのか」「幼虫ならば、どんな成虫になるのか（成虫ならばおなじみの虫であることが多い）」「どんな気候を好むのか」「明るいところが好きなのか、暗いところが好きなのか」と、こんなことが話題になる。

明るいところか暗いところかの選別は主に草原性か森林性かの推定でもある。川や池に縁のある昆虫もいて、生活の一時代を水中で過ごす昆虫もいる。それらは魚の餌になりやすいのかなりにくいのか、時には魚を餌にする肉食性の昆虫もいて魚介類との関係、また草食性ならば水中植物の繁栄衰退との相互関係も大事な観察ポイントになる。

水域にいる昆虫の問題では、昔は多かったのか？今は増えているのか減っているのか？川の様子の変化で増えているのか減っているのか？水田との関連はどうか？池、特にため池との結びつきは強いのか？

森林のものならば、林がなくなれば絶滅するのか、逃げ出してどこかに生活の一部を変えて住み着くのか、これが家屋などを利用して人間生活の中に入ってくるものも居る。林を構成する樹種が雑木林的であるのか針葉樹等の単純な林に変わってきているのかで、細々と生き残っているのか、近縁の別の種類に置き換わってしまっているのかを見る。草原性であれば、安定した深い草地で森林に移ろうとするような丈の高い草の上方を生活空間にしているのか、直射光が直接地表には届かないような草地の地表で生活しているのかどうか問題になる。また、常に耕されたり、最近のように大きな工事や住宅化が繰り返されて、裸地化することが多い、つまり攪乱の多い草地に適応しているのか否か？そんなことを見ながら現れる虫たちの顔ぶれを整理し、どんな環境を観察してきたのかをまとめる。これは私たち自然系の観察会の場合には生き物の生活だけを意識することが多いの

だけれど、実は人間の生活の影響をずい分考察していることでもある。

大阪府下一斉ドングリ祭りという催しが、毎年、秋に行われる。吹田自然観察会という団体を中心に、大阪の各地で活動している自然愛好会の団体がそれぞれの活動地でドングリに関するいろんな工夫の行事をやるという一種の自然愛好派のお祭りである。

ドングリのなる木がある林を観察会の地を選んで樹木を観察し、ドングリを拾い集める。そして、ドングリを使った工作やゲームで子供たちと遊び、またドングリを使ってクッキーを焼いたり染色をしたりと、ドングリとドングリのなる木を生活の中に生かしていた時代を思い起こすことを含めた総合的な自然観察会である。

自然愛好会系のドングリ祭りの主体はドングリのなる木の観察、そしてドングリのなる木に集まる虫やドングリを食べる小動物の観察が主だが、ドングリを使った生活の体験もある。実行団体の中には、ドングリを主な食糧にしていたといわれる縄文時代に思いを馳せ、火起こしや縄を綯う作業まで試みる団体もある。

もっと一般的な自然観察会の具体的な内容はどんなものがあるのでしょうか？

まずは自然観察会に参加してみましょう。



ドングリで作ったネズミの家族

——明治の引札と大小曆——

内海寧子

江戸時代の暦

一枚摺の魅力をご紹介する序章として、まずは、天空の話からお付き合いいただきたい。

月の満ち欠けと太陽の動き（地球の公転運動）から決めた暦が、江戸時代の太陰太陽暦、いわゆる旧暦である。これは、1ヵ月の日付を月の満ち欠けに合わせて決めるものだ。天体の月は新月から次の新月に至るまで、約29.5日を要する。このため、1ヵ月が30日、または29日という、大小ふたつの月をつくって暦を調節した。しかし、この大と小の組み合わせでは、次第に季節と日付にずれが生じてしまう。そこで、閏月をおいて1年が13ヵ月になる年を数年に一度、設けていたのである。

現在、1年は12ヵ月。しかも、小の月にあたる30日（28日）の月は「西向く士（二・四・六・九・十一月）」で固定している。しかし、太陽暦が採用される明治6年以前は、月の大小が毎年入れ替わるため、その年毎に大小の順を把握する必要があった。そこで登場するのが「大小」と呼ばれた「大小暦」である。

大小曆

大小暦は、一年間の大小の順を、短い文章や絵で示した略暦である。例えば、甘党の私も大好物な

大好は雑煮草餅柏餅
盆のぼた餅亥の子寒餅

という和歌も、実は、宝暦13年の大小暦になっているのだ^①。「大好」つまり大の月は、雑煮（正月）・草餅（3月）・柏餅（5月）・盆のぼた餅（7月）・亥の子（10月）・寒餅（12月）と、餅づくしで表した暗記文式の大小暦である。

江戸時代、絵の中に大小を配して木版摺にし、年始の挨拶として知人に贈呈する習慣があった。明和2年(1765年)には、牛込の旗本、大久保甚四郎巨川・阿倍八之丞沙羅が中心となる、絵暦の交換会がおこなわれ、大小暦の摺物が江戸で大流行した。この時、鈴木春信が多色

摺の絵暦を提供しており、これが錦絵誕生の契機となっていることは、周知のとおりである。当時の大小暦に見られるさまざまな趣向については、岡田芳朗氏が『江戸の絵暦』（大修館書店、2006年）で紹介しているが、謎掛けの一種である、判じ物になっているものが多い。

鬼洞文庫の正月引札

さて、関西大学総合図書館のコレクションには、岸和田の蒐集家・出口神暁氏が蒐集した文庫、「鬼洞文庫」がある。鬼洞文庫のコレクションには、和泉・大阪の郷土史に関する書籍とともに、番付や引札などの一枚摺が多数含まれている。2005年、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの学芸遺産研究プロジェクトが、鬼洞文庫の引札調査を実施し、私も調査の様子を拝見した。



画像1

調査中の引札を眺めているうちに、一枚の引札に目が留まった【画像1】。筆を右手に色紙を見つめる大黒さま、その傍らに立つ弁天さまといった正月引札である。正月引札とは、正月に商店が顧客に配った店名入りのちらしであるが、ちらしとはいえ、部屋に貼って眺めるインテリアの役割をも果たしていた。上掲の正月引札では、木綿や金巾かなきんの商品名を掛軸に書き連ね、末尾に「右相かわらす御用向の程、希上ます」という口上書を添えている。左の看板に記

されているのは、店の商標や所在地、店主の名前だ。さて、自筆の書に満足げな大黒さまであるが、何としたためたのであろう。

かづかず めでたく ぞんじ候

「大いにめでたいことでございます」という意味の新年の祝言である。色紙の上部にはもう一筆、「すむハ大 にごるハ小」とある。はて、どういう意味かしら、と頭を絞っていると、同じような引札がもう一枚あるという。



画像2

こちらでは、恵比寿さまと福祿寿が楽しげに巻物を広げている【画像2】。二人の足元には、打出の小槌、隠蓑、隠笠、宝やく、分銅、宝珠などが散りばめられた、宝づくしのめでたい風景。縁起物の正月引札である。巻物に商品名と口上書があり、看板に店名を掲げる趣向が、先ほどとよく似ている。右側にも看板が掲げられ、何か記されている。

すむハ大 にごるハ小

かづかずめでたくぞんじ候

同じ詞である。「すむは大、にごるは小」。「かづかず・めでたく・ぞんじ候」「カ・ズ・カ・ズ・メ・デ・タ・ク・ゾ・ン・ジ・候」…。しばらく考えて、あっと思ひ当たった。大小だ。勘のよい方ならもうお気づきのことだろう。これらは判じ物の大小暦になっているのだ。

大小暦の謎解き

暗号文の謎を解いてみよう。「かづかずめでたくぞんじ候」は12文字からなり、一年間の月数を表している。それでは、「すむは大、にごるは小」とは、何のことだろう。これは、江戸時代の大小暦によく用いられる清濁大小の手法で、各音節の清音・濁音の別で月の大小を表

している。この場合は、「すむハ大」なので清音は大の月、「にごるハ小」で濁音は小の月であるから、次のようになる。

1	2	3	4	5	6	7	8	月
カ	ズ	カ	ズ	メ	デ	タ	ク	
大	小	大	小	大	小	大	大	
9	10	11	12	月				
ゾ	ン	ジ	候					
小	大	小	大					

「西向く士」が小の月となる、現在のカレンダーと同じ暦が隠されていたのだ。これらは、【画像2】の背景に掲げられた紀元節などの御祭日、さらに、染料に使用された鮮麗な紅色から考えて、改暦後の明治期に作成された摺物であろう。

暦の歴史をひもとくと、判じ物になった大小暦の存在が頷ける。江戸時代には、暦の頒布が幕府に統括されており、暦を自由に作成し、販売することが禁じられていた。改暦後も10年間は、頒布商社が独占権を握っており、暦を自由に頒布することは制限されていたのだ。判じ物で表した大小暦は、遊び心に富んだ、知恵の結晶といえるだろう。

新しい暦のもと、判じ物の大小暦が次第に姿を消していくなかで、江戸の機知が最後の輝きを見せる一枚摺である。

【画像1】

関西大学総合図書館所蔵

「木綿金巾紅無地同紅板メ類同鬱金紅染元仕入所 [引札]」

【画像2】

関西大学総合図書館所蔵

「金巾染地類ゆうきじま有松紋り染手拭小倉帯地 [引札]」

① 松浦静山『甲子夜話』第61巻（『甲子夜話』4、東洋文庫333、平凡社、1978年）。この大小は宝暦13年のほか、文政8年の大小としても通用するものであったという。

クントウル・ワシ博物館

——日本アンデス調査団の奮闘記——

荒 田 恵

クントウル・ワシ博物館は、日本のアンデス調査団が1988年より2002年まで継続して発掘調査を行ってきた、クントウル・ワシ遺跡のふもとに建っています。この遺跡はペルー共和国の北部山地の標高2,300mに位置する、紀元前1000年頃から50年頃まで続いた祭祀遺跡です。「クントウル・ワシ」とはケチュア語で、「コンドルの館」を意味しています。首都リマからは車でおよそ12時間から13時間の距離で、カハマルカ県サン・パブロ郡クントウル・ワシ村(旧ラ・コンガ村)に所在しています。



クントウル・ワシ博物館は、国立のものでもなく、県立のものでもありません。遺跡より南米最古級の金製品が出土したことを機に、日本のアンデス調査団が中心となって建設した博物館です。建設当初から、その運営は、地域住民が組

織する文化協会が主体となって行われ、時おり、日本人研究者がアドバイスをを行うというスタイルをとっています。

さて、クントウル・ワシ博物館建設のお話をする前に、日本のアンデス調査団が行ってきた調査について簡単にふれてみたいと思います。

あまり知られていないかもしれませんが、日本のアンデス調査は50年近い歴史があり、故泉靖一先生が1958年にペルー共和国にて遺跡の分布調査を行ったことに始まります。1960年には、ペルー北部山地のワヌコ盆地、標高約1,960mに位置するコトシュ遺跡の発掘調査で、アンデスに土器が出現する以前に建てられた立派な神殿を発見しました。この発見は、当時のアンデス先史学に大きな衝撃を与えるものでした。その後、コトシュ遺跡周辺の調査を行った

後、さらに北のカハマルカ県へと調査地を移していきます。いずれの調査でも、祭祀遺跡(神殿)を対象としているのは、アンデスにおいて文明社会が形成される過程を解明する際に、祭祀遺跡(神殿)が重要な鍵を握っていると考えられたからです。これら一連の調査を通してアンデス調査団が得た見解とは、はじめに神殿があり、神殿を維持する行為(神殿更新)が、生産性を向上させ、政治、宗教、文化などを洗練させていったというものです。

国立民族学博物館の関雄二先生は、クントウル・ワシ博物館建設にともない、アンデス山地の小さな村に電気が引かれ、インフラが整備されていく様は、アンデス調査団が出した文明形成過程に対する見解に符合しており興味深いとお話してくださったことがあります。

クントウル・ワシ遺跡で金製品が発見されたのは、1989年の調査のときです。遺跡の頂上に設けられた大基壇の上には、中央に半地下式の方形広場があり、それを取り囲む三方には基壇が配置されていました。正面の基壇の内部を発掘したところ、一時期前の小さな基壇が隠れていました。この小基壇には竪穴の痕跡があり、それを深さ2メートル以上掘り進めると、粗い石積みの壁に当たりました。そして、その奥に墓室があることをつきとめたのです。墓に埋葬されていた人物の頭蓋骨のあたりからは、金製品が発見されました。それは、金の薄板に六角形の窓をあけ、そこに人物の顔を打ち出した金の小板を吊り下げた冠でした。その後、隣り合う似たような地下式墓室からも多数の金製品が発見されました。

2つ目の墓を掘り終わった段階で、村では保存委員会が立ち上げられ、調査団を交えた金製品の保管をめぐる集会が開かれました。1回の集会で問題が解決することではなく、時にはサン・パブロ市長を交えて集会が開かれ、金製品の保管について何度も話し合われました。その間、調査団は文化庁カハマルカ支所へ金製品発

見の連絡を行い、リマでは報道機関に発表する手筈が整えられました。

村人の総意は、村に博物館を建設して金製品を保管したいというものでしたが、結局その年は、安全面での問題もあり、サン・パブロの町役場に預けることに決まりました。

翌年、調査を再開するときになって、金製品が町ではなく、村に戻っているという文書をリマの文化庁で調査団は目にします。事の真相は、地方選の結果、サン・パブロの町長が落選し、新任の町長のいやがらせを避けるために、金製品を村人たちに戻したというものでした。以後、村人は密かに金製品を保管していたようでした。

この年も引き続き、金製品の保管をめぐる集会が開かれました。そしてその場で、調査団は、かねてから保存委員会の一部のメンバーに打診をして了解を得ていた案を、村の住人に提案したのです。その案とは、村に金製品を保管するための博物館を建設するために、いったん金製品を日本に持ち帰り、展覧会を開催してその資金を調達するというものでした。

役所あるいは政府に対する不信感が強い村の住民は、金製品が日本から戻ってきた折には、必ずクントウル・ワシに返還することを調査団に約束させたうえで、全員が即座にこの提案を受け入れたのです。自分の国の政府や役所を信用しない村の住民が、“よそ者”である日本人研究者を信用したのです。その事実は、発掘調査を通して培われた、両者のあいだの強い信頼関係を物語っているといっても良いでしょう。

その年の調査終了後、サン・パブロ町や文化庁カハマルカ支所の政治的思惑に翻弄されながらも、調査団はなんとかクントウル・ワシからの金製品の持ち出しに成功しました。そして10月には、リマのムセオ・デ・ラ・ナシオン（国民博物館）で最初のクントウル・ワシ展覧会を開催したのです。日本では、1992年3月、読売新聞社後援による東京日本橋の三越百貨店での展覧会を皮切りに、熊本、愛知、宮崎、大阪、山梨、新潟、長野、石川、群馬、広島で展覧会が開催されました。

1993年に、調査団はクントウル・ワシ遺跡の発掘調査を再開し、それと平行して博物館建設の準備を始めました。一方で、調査団は村の住民を集めて集会を開き、持ち出した発掘品の



クントウル・ワシ博物館

展覧会を日本各地で開催して資金を集めつつあることを報告しました。そして、翌年には博物館の建設にとりかかり、村に博物館を委譲することを伝え、運営は、調査団がサポートをしながら、村の委員会に任せることになったのです。村の住民は調査団に賛同し、その年の9月に、運営主体として「クントウル・ワシ文化協会」が設立されました。

文化協会のメンバーの一人から、博物館用地が寄贈され、翌1994年には博物館の建設が開始されました。そして、3年間にわたって日本に持ち出されていた出土品はクントウル・ワシに返還され、日本大使館の「草の根無償援助」による展示設備の寄贈もあり、その年の10月15日に、無事、開館式が挙行了されたのでした。

現在、「クントウル・ワシ文化協会」会員から選出された博物館運営委員会を中心に博物館は運営されています。現在でも博物館の運営は順風満帆ではありません。調査団の先生方は、問題が生じるたび、文化協会のメンバーと話し合って解決法を探っていらっしゃいます。2004年より、クントウル・ワシで出土品の整理作業に参加させてもらっている筆者は、そのような先生方の後ろ姿を傍らで拝見し、海外調査への取り組み方を学ばせて頂いています。

ペルーには私の興味を惹く遺跡がたくさんあります。同様に、調査地で起こる様々な問題に対して、一人の人間として真摯に向き合っている先生方の“人間くささ”もまた、私を魅了してやまないのです。

【参考文献】

- ・大貫良夫 2000『アンデスの黄金 クントウル・ワシの神殿発掘機』 中公新書
- ・加藤泰建・関雄二編 1999『文明の創造力 古代アンデスの神殿と社会』 角川書店

◆ 博物館だより

◇平成18年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	5	16	13	16	2	0	15	15	1	0	0	0	83
入館者数	826	2,634	226	1,276	816	0	1,001	660	40	0	0	0	7,479

平成17年4月から長らく簡文館増築工事のために閉館していましたが、本学創立120周年を記念して本年4月には「インカへの道—アンデスの秘宝—」展、また10月には「明日を古（いにしえ）に学ぶ—博物館コレクション—」展を開催いたしました。「インカへの道」展は3,460名、「博物館コレクション」展は1,266名の方にご覧いただくことができました。さらに、それぞれの特別展の合間に第2展示室のみではありますが、本館の名品を展示、一般公開しました。

平成19年4月には、常設展示場として第1展示室をリニューアルオープンします。

◇平成18年11月27日（月）～12月1日（金）、恒例の博物館実習展を開催しました。朝日新聞に記事を掲載していただいたこともあり、一般の見学者が少なからず来館され、「博物館実習」履修生も緊張して対応に務めました。328名の入館がありました。

◇博物館では平成19年4月8日（日）から5月20日（日）まで、「小判とおかね—近世から近代の金銀貨幣—」を開催します。良貨の誉れ高い正徳小判や明治時代の金貨・銀貨をはじめとして1,000点を超える近世から近代の貨幣を展示する予定です。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

『阡陵』第54号をお届けいたします。今号は平成18年7月29日にご逝去された網干善教先生（名誉教授、関西大学博物館初代館長）の追悼文を米田先生から、また、黒田先生、博物館学課程をご担当いただいている林先生、夏のなんでも相談会でご指導いただいている河合先生からも玉稿をいただきました。さらに、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの内海研究員、博物館学芸補助の荒田が報告をあげております。ご執筆賜りました皆様に感謝申し上げます。

平成18年度も多くの方から貴重な資料をご寄贈いただきました。羽間平安前理事長からは京都の紅花商「最上屋」で幕末から明治前半まで使われていた「金銀出入帳」のほか、行灯、燭台一對、長持など江戸時代の生活道具を、田嶋英雄氏からはペルー出土のナスカ土器とチャンカイ織物、上野隆三氏からはSP及びLP盤1,488枚のレコードコレクション、兼松一美氏からは薙刀刀身一振を頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。ご寄贈くださった方々のご期待にこたえられるよう、これらの資料は積極的に展示し、教育・研究活動に役立てていきたいと思っております。なお、寄贈資料については近く紙面にてご紹介していきたいと考えております。

表紙は石鏃貫入猪頭骨 Wild Boar Skull Penetrating Stone Arrowhead（宮城県気仙沼郡小友村瀬澤出土）です。前頭部に石鏃を射込まれた貫入痕が残っていますが、狩猟時につけられたものではなく儀式として矢を射込まれたものと思われます。